

鳥取発・円熟のオーケストラ

チャイコフスキー・モーツァルト最晩年の傑作!!

とリアート (鳥取県総合芸術文化祭) 参加事業
鳥取市民文化祭参加



鳥取県オーケストラ連盟演奏会

2012 鳥取公演

リスト

交響詩「前奏曲」

モーツァルト

クラリネット協奏曲イ長調 K.622

チャイコフスキー

交響曲第6番ロ短調 op.74 「悲愴」



クラリネット独奏
／人見 剛



指揮／高野 秀峰

(東京オペラプロデュース指揮者、桜美林大学非常勤講師)



演奏／鳥取県オーケストラ連盟

2012.10/14 (日)

とりぎん文化会館 梨花ホール

午後2時開演 (午後1時30分開場)

【全席自由席】 一般 1,500円 (当日 2,000円) 高校生以下 500円 (当日 1,000円) [未就学児無料]

主催：鳥取県オーケストラ連盟

共催：鳥取県文化団体連合会、鳥取市交響楽団、倉吉室内合奏団、米子管弦楽団、
鳥取大学フィルハーモニー管弦楽団

後援：鳥取県、鳥取市教育委員会、朝日新聞鳥取総局、山陰中央新報社、産経新聞鳥取支局、
新日本海新聞社、中国新聞鳥取支局、毎日新聞鳥取支局、読売新聞鳥取支局、
㊤㊤㊤ 鳥取放送局、山陰中央テレビ、山陰放送、日本海テレビ、
いなばびよんびよネット、日本海ケーブルネットワーク、鳥取市文化団体協議会

■プレイガイド

アコヤ楽器店、とりぎん文化会館、鳥取大丸、トスク本店、
今井書店 (吉成店、鳥取駅前店)

■お問合せ

鈴木 ☎090-8064-4304 まで

■無料託児サービスあり。場所第3練習室。要予約。

前日までに☎090-5375-3077 上萬まで。当日も若干受け入れ可能。
親子観覧席もご利用になれます。

クラリネット独奏 人見 剛さんインタビュー



— クラリネットを始められたきっかけを教えてください。

中学校で、入部活動を野球部が吹奏楽部が迷い、吹奏楽部へ。

少し迷って出遅れたため大半の楽器の新入生枠の席は埋まっており、吹奏楽では沢山必要なクラリネットへ。野球部に入ったらどんな人生だったのでしょうか。

— クラリネットの魅力を教えてください。

幅広い音域。多彩な音色。消え入るような弱音からホールを包み込むような強い音まで自由自在に出す事が出来る。

おとなしく伴奏にまわっていたかと思うと、いきなり表に出て来て素敵なメロディを奏でる・・・という書きすぎると自分へのハードルをどんどん上げてしまいますね。クラリネットは多くの作曲家からそのポテンシャルの高さゆえ優等生的に扱われますが、もしかすると他の楽器からは「スリルやつ」だと疎まれていたかもしれません。

— 今回のモーツァルトの協奏曲への想いを教えてください

僕がクラリネットを始めてから受けた恐らく2度目の大きな衝撃が、高校2年の時に初めてこの曲を聴いた時でした。それから寝ても覚めてもモーツァルト。しかしその後クラリネット専攻の大学生になって以来ずっと試験やコンクール、オーディションの定番課題曲として、何度も何度も僕を苦しめてくれました。成績(?)の付かないモーツァルトのクラリネット協奏曲の演奏は、本当に貴重で幸せな事です。作曲家自身が楽しんで紡ぎ出したであろう音符の数々を、作曲者に負けないくらい楽しんで奏でたいと思います。

人見 剛プロフィール

東京生まれ、岡山育ち。3歳よりピアノ、12歳よりクラリネットを始める。1995年島根大学教育学部特音過程を卒業。1996年渡独。ドイツ国立エッセン・フォルクヴァンク音楽大学及び同大学院ソリスト科にて学ぶ。2002年ドイツ国家演奏家試験合格。2007年6月帰国。日本に活動拠点を移し、演奏活動を開始。また、音楽教育へも活動の場を広げ、オーケストラや吹奏楽のトレーナーとしても定評がある。島根大学では手塚実(現・山梨大学教授)、エッセン音楽大学ではWolfgang Esch(デュッセルドルフ交響楽団首席クラリネット奏者)の各氏に師事。また、村井祐児、森田利明、芦田修次、田村尚文の各氏のもとでも研鑽を積んだ。

指揮者が語る演奏曲の魅力「私はこう振る!」

指揮/高野 秀峰

リスト/交響詩前奏曲

「音楽が詩芸術と内的に結びつくことが芸術のより自由な発展を可能にし、芸術は時代精神に則したものととなる。」これはリストの音楽原理であり、19世紀のロマン主義における重要な美学と合致する。全ての芸術には共通するポエジーがあり、このロマン派の時代には、詩のポエジーも音楽のポエジーも一致するとされていた。リストが創始した「交響詩」はこの美学に基づき生み出された標題音楽である。

全ヨーロッパを熱狂させたヴィルトゥオーゾのピアニストからヴァイマルの宮廷楽長という指揮者への転身。このことはリストの創作に劇的な変化をもたらした。管弦楽作品の充実が顕著となった。この「前奏曲」では「主題変容」という自身の音楽語法が徹底して用いられている。一つのモチーフ(2度下行、4度上行)がリズム、調性、アーティキュレーションを様々に変容され、多楽章の要素を凝縮した単一楽章の中を循環して構成されている。

注目すべきことは、この曲は完成された後に標題を付されたことだ。リストは標題から喚起された事物や印象を描写して音楽化したのではない。標題は詩的な観念であり、作曲家の作品が表現する詩的観念を示すものだった。ここにリストが指向した、詩と音楽の内的な結合による音楽の革新が示されており、古代ギリシャの概念でプラトンの時代に解体してしまった「ムーシケー」を再び統合し再生する試みを読みとることができる。その意味で交響詩「前奏曲」はリストの創作活動において、また音楽史上においてのメルクマールと言えるだろう。

モーツァルト/クラリネット協奏曲Ⅰ長調

モーツァルトは生涯の最後の年である1791年にも、魔笛 K.620、クラリネット協奏曲 K.622、レクイエム K.626などを作曲、旺盛な創作活動をみせている。

18世紀初頭に生まれた楽器であるクラリネットは個性的な音色で人々を魅了し、オーケストラの中に素早く定位置を獲得した。モーツァルトがウィーンに定住した1781年頃、宮廷劇場管弦楽団に所属していたクラリネットとバセットホルンの名手であるアントーン・パウル・シュタードラーと知己を得ている。アントーンはクラリネットの低音域(シャリュモー音域)を得意とする奏者で、首席奏者でありながら自らすすんで第二クラリネットのパートを演奏することもあったという。この名手との出会いがクラリネット協奏曲を作曲するきっかけとなった。

楽曲は三つの楽章から成り、1787年に作曲され199小節まで現存するバセットホルン協奏曲を原曲としている。シャリュモー音域と高音域の対照、技巧的な速いパッセージや駆け上がる分散和音、協奏部におけるオーケストラとの生き生きとした対話的な掛け合いなど、クラリネットの魅力を余すところなく引き出した屈指の名曲である。

チャイコフスキー/交響曲第6番ロ短調「悲愴」

ロマン派音楽の金字塔ともいえる、チャイコフスキー最後の交響曲。この曲は嘆きと死の気分に覆われている。スラーを伴う短二度下行の「ため息の動

機」の使用、四度の下降音型(ラメントバス)が用いられていることから、言葉を伴わないレクイエムの形象を感じることができる。ロマン派の音楽もバロック期や古典派の音楽語法を継承しており、その中でも音楽修辭法はバロック期には欠かすことのできない表現技法であった。

半音階の下行はパッス・ドゥリウスクルス(Passus duriusculus=キリストの苦難の歩み)というフィギュールであり、苦難や悲しみを表す。また下降する音型(カタバシス Catabasis=下降音型)は否定、死、絶望といった情緒を表すものだ。ラメントバスは悲哀を表す四度下降の音型であり、バロック時代を通してひとつの定型となっている。第一楽章はきわめて独創的なソナタ形式。序奏部におけるコントラバスの空虚五度の響きの上にファゴットで奏されるマイア受難曲のエコーが印象的だ。半音階下降上に嘆きのモチーフが執拗に続く。展開部のトゥッティは直前の第二主題がピアノ/記号を6つも付けた最弱音で閉じられたのを打ち破るフォルテッシモで開始。この強烈な対比は一気に拡大されたオーケストレーションにより劇的効果を発揮し、あたかもDies iraeのように響く。

第二楽章は三部形式で叙情的な五拍子の舞曲。主部における二長調上の優美な上昇旋律に対し、中間部は平行短調上の下降する旋律が対照をなす。第三楽章はタランテラとマーチの組み合わせによるリート形式。スタッカートで付されたせわしない音型、強烈な威嚇、弦楽器群から木管楽器群に交互に奏される上昇下降を組み合わせた連続するパッセージがマーチを印象的なものになっている。第四楽章は弦楽器群の各声部を交錯させて一つの旋律を形成する書法が大変独創的だ。クロマティックな和声、オクターブユニゾン、五オクターブにも及ぶ激烈なトゥッティ、ひそやかなコラールを経てロ短調の保続音上に四度下降のモチーフが繰り返され最後には低弦のみで曲を閉じる。初演された9日後に作曲家が亡くなり、この交響曲はチャイコフスキー自身の白鳥の歌となった。

高野秀峰プロフィール

東京生まれ。明治学院大学及び武蔵野音楽大学卒業。作曲を鈴木輝昭、指揮をクルト・レーデルの各氏に学び、2001年にチェコ国立モラヴィア・フィルハーモニーを指揮し、ヨーロッパにデビューする。現在、東京オペラプロデュース、オーケストラ・アンサンブル・トウキョウなどで活躍中。アマチュアオーケストラの指導にも定評があり、昨年の鳥取市交響楽団定期演奏会での「運命」の熱演も記憶に新しい。

鳥取県オーケストラ連盟 県下4オーケストラが力を結集して演奏

1995年、鳥取県内のオーケストラ文化の発展を目的に発足。県下のアマチュアオーケストラ4団体(鳥取市交響楽団、米子管弦楽団、倉吉室内合奏団、鳥取大学フィルハーモニー管弦楽団)が加盟し、東部、中部、西部の順に年1回演奏会を開催し、今回は、鳥取市交響楽団が中心となって演奏を行っている。

2002年、国民文化祭とっとり「オーケストラの祭典」でマーラー/交響曲第1番「巨人」を演奏、絶賛を浴びる。2011年には、海づくり大会の式典行事に参加した。